

私は大学で、受講生 200 名ほどの「感性」という授業を担当しています。音楽専攻だけではなく、美術もスポーツもビジネスもすべての専攻の 1 年生が対象です。この講義は教養科目の 1 つで、「感性」というキーワードから教養を深めようという目的があります。

音楽など芸術系に携わる私たちは、日常的に「感性を高める」という言葉を使いますが、あらためて、「感性」って何だろうと考えると、とても漠然としていることに気がつきます。

「感性」は、すべての人に自然に身についたものなののでしょうか。私は、能動的に磨いたり、深めたりしなければ、「感性」は育まれないと考えています。そこで、講義でお話していることをこの紙面で少々紹介してみたいと思います。

「感性」は、「教養」と「五感」に深くかかわりがあります。大学では、教養科目が必ず設けられており、それがなければ大学とは認定されません。このシステムは、なんと古代ギリシャ時代からの潮流から来ています。ギリシャのアカデミアという町にできた学校が基となり、そこで教えられていた自由七科、つまり、人が持つ必要がある知識や学問の基本が 2500 年の歳月を経ても受け継がれているのです。大学（アカデミー）はその理念から、必ず教養科目があるのです。そこで、「感性」を磨くには、この教養が不可欠になります。教養を身につけると物事がより深く理解できるようになるのです。例えば、フランツ・リスト作曲の「メフィストワルツ」などピアノ曲を聴く場合、メフィストが何なのか、リストが何からインスピレーションを得たのかがわかると、その曲の聴き方が、格段にわかりやすく、親しみやすくなります。この曲の背景には、ヨーロッパ人ならみんなが知っている物語「ファウスト」という民話の存在があります。ゲーテの「ファウスト」は、とても有名ですが、この物語は、ゲーテだけではなく他の作家も書いていて、悪魔（メフィスト）の誘惑に乗って、若返りを見返りに魂を売ることができるか、というキリスト教徒にとっては、大きな命題を含んでいます。その中で、リストは、悪魔の誘惑を題材にピアノ作品を作曲しました。そのような知識があると、この曲の冒頭の三連符の連打も、メフィストが人間を誘惑して自分の悪の側に引きよせようとするささやきのように感じるすることができます。この曲の途中には、その誘惑に打ち勝とうとする心情も表現されています。このように、ちょっとした知識があると、音楽を聴くときも、自分で演奏するときも、断然、理解度が増して、「感性」が刺激されるのです。クラシック音楽は、ヨーロッパが発祥ですので、ヨーロッパ人の教養の一端に少し触れるだけで、さまざまなイマジネーションが膨らんでいきます。

14 世紀に書かれた、ダンテの「神曲」やペトラルカの詩、また、ギリシャやローマの神話は、日本の神道に通じるものがあり、八百万の神の存在が、擬人化されています。この知識があると、ルネッサンス時代から現代まで続く絵画の鑑賞にも役立ちます。裸の女性は、ルネッサンス時代、神話に登場する女神に限られていました。そのような観点で絵画を鑑賞するにも、いろいろな知識があると、さらにそこから「感性」が磨かれ、幅広い視野で物事が見られるようになります。私は、この講義が楽しく、学生たちと一緒に「感性」を育てています。